

日本語要約・臨床解説

隣接面のオーバーハングと歯周組織：小さな段差を見直す根拠。

張り出した修復物は、画像上の骨吸収と深いポケットに関連。修正によって骨が戻る量を示す研究ではない。

保存修復 / システマティックレビュー

24研究、5,955人。

研究デザインと対象の違いを踏まえて解釈。

01 研究の要点

目的

臼歯隣接面修復物のオーバーハングと歯周指標の関連を調べた。

方法

2025年4月まで検索し24研究を採用。骨吸収は8研究17,300歯・面、ポケット深さは3研究27,679歯・面を統合した。

結果

骨吸収の平均差は0.58mm (95%信頼区間0.12〜1.04) で、感度分析では0.35mmだった。ポケットは平均0.28mm深かった。証拠の確実性は低と評価された。

結論

オーバーハングは不良な歯周指標と関連する。修復物の点検を支える結果だが、因果効果や修正後の回復量は確定できない。

読み取れること

- 大半は横断研究で、原因と結果の順序が明確でない。
- 42%の研究でバイアスリスクが高い。
- 歯・面の数と独立した患者数は異なる。

02 臨床で考える

清掃しにくい隣接面を、修復物と歯周組織の両方から確認しているか。

1. 歯周所見と修復物の辺縁・接触関係を併せて確認し、局所的な清掃困難の要因を整理する。
2. 修正や再修復を検討する際は、欠陥の位置と程度、う蝕や歯質の状態を評価し、必要最小限の対応を考える。
3. 対応後は清掃性と炎症などを再評価し、元の骨吸収量がそのまま回復すると患者に約束しない。

異なる対照を含む平均差と、オーバーハングのない修復物だけとの比較を混ぜて説明しない。

臨床で深く読む

原著の報告と編集上の解釈を区別した解説です。AI編集・歯科医師未監修。

隣接面のオーバーハングは悪い歯周指標と関連するが、除去の効果を直接示すとは限らない。

主に横断研究から得た関連であり、修復物の不適合が骨喪失を起こした量や、修正で回復する量は推定できない。小さな平均ポケット差と骨喪失の結果を同じ意味にまとめない。

対象

24研究、5955人。対象は臼歯部隣接面修復と歯周指標を調べた複数国の集団で、大半が横断研究。

介入・評価対象

隣接面修復物のオーバーハング。

比較

オーバーハングのない修復など、各研究の比較条件。

評価項目

画像上骨喪失とプロービング深さ。主要・副次の順位は抄録で明示されない。

追跡・評価時点

検索は2025年4月まで。統一した追跡期間は抄録にない。

結果の大きさを、診療の視点で読む

画像上骨喪失

原著の報告：8研究17,300歯・歯面で平均差0.58 mm (95% CI 0.12～1.04)。感度分析後0.35 mm。

臨床での読み方：対象は人ではなく歯・歯面の総数。解析の選び方で推定量が変わる。

比較条件別骨喪失

原著の報告：非オーバーハング修復との比較は0.82 mm (95% CI 0.21～1.43) 大きかった。

臨床での読み方：別の比較集団の推定であり、0.58 mmに加算しない。

ポケット深さ

原著の報告：3研究27,679歯・歯面で0.28 mm増加 (95% CI 0.26～0.30)。

臨床での読み方：統計的関連はあっても、個々の患者での進行量や治療必要度を直接規定しない。

目の前の患者に、どこまで重なるか

研究に近い条件：臼歯部隣接面修復の形態と局所歯周所見を併せて評価する場合。

未確定の範囲：修復物の修正による骨再生、歯の喪失予防、他部位への同じ効果量は未確立。

原著の確実性評価

42%の研究が高バイアスリスクで、骨喪失・ポケット深さの確実性を著者は低いと評価した。

時間順序

横断研究センターのため、歯周病の先行、清掃状態や修復理由などの交絡を切り分けにくい。同じ人の複数歯面が含まれ得るため、歯面数の大きさをそのまま独立した患者数の多さと考えない。平均値の小さな差でも、その分布や局所症状、修復物を修正する負担が不明なまま一律の処置基準にはできない。

自院で検討するなら

- ・ 修復形態だけで結論せず、同部位の出血、深さ、画像、過去経過を照合する。
- ・ 研究の平均差を、修正処置後の改善予測として患者へ提示しない。

患者さんへの説明例

詰め物の端が張り出している場所では、骨や歯ぐきの検査値が悪い傾向が報告されています。ただ、張り出しを直せば骨が何ミリ戻るという研究ではありません。周囲の炎症や過去の変化も合わせて状態を判断します。

患者の希望と治療条件に合わせ、歯科医師が内容を検討するための研究説明例です。個別の治療結果を保証するものではありません。

同僚と考える問い

局所的な悪化を修復形態、清掃条件、元の歯周病のどれに帰属する前に、どの比較資料が必要か。

コメントする：<https://nakanoyuyadental.com/articles/overhanging-restoration-periodontal-health#comments>

臨床解説の確認資料：原文抄録（Objectives/Methods/Results/Conclusions（原文全抄録））<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/42642462/>

研究の限界・解釈上の注意

- ・ 低確実性で、口腔衛生などの交絡を完全に除けない。
- ・ 修復材料や比較対象が研究間で異なる。
- ・ オーバーハングを修正する介入の効果量として読めない。
- ・ 原文抄録を確認。全文の方法・補足資料は未確認。

03 原著・資料の範囲

The influence of overhanging proximal restorations on periodontal parameters: a systematic review and meta analysis.

Caicedo-Jaramillo LD, Parra-Arango M, Rodríguez-Medina C, Botero JE.

Evidence-based dentistry | 原著公開日：2026-08-25

PMID：42642462 | DOI：10.1038/s41432-026-01246-8

PubMedで原文抄録：<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/42642462/>

出版社の原著：<https://doi.org/10.1038/s41432-026-01246-8>

資料確認・作成日：2026-09-15

収録範囲：既存の日本語要約と編集上の臨床解説。原著全文の翻訳ではありません。確認範囲と未確認事項は上記の限界欄に記載しています。

免責事項：AI作成・歯科医師による監修未実施。医療者の学習用資料であり、個別患者への診断・治療指示ではありません。臨床判断に用いる前に原著と最新の診療指針を確認してください。